



「楽しい気象観察図鑑」

武田康男 著

株式会社草思社，2005年8月，
155頁，1,900円（本体価格）
ISBN 4-7942-1424-3

楽しい気象観察図鑑が刊行された。「そのままやないか！」との突っ込みがありそうだが、名が体を表わしているタイトルどおりの本なのである。約200点の美しい写真とカラフルなイラストが散りばめられたページを繰ると、少年時代にワクワクしながら眺めていた図鑑類の感覚を思い出す。空の美しさを再認識させてくれる写真も多く、子どもたちばかりでなく、ホッと一息つきたい大人たちにもお薦めの1冊だ。

本書の特長の1つとして、すべての現象を著者自身が体験し撮影していることが挙げられる。その豊富な経験に基づき、「ぜひ、自分の目で見てほしい」というメッセージが発せられている。著者のいうとおり、自宅の窓から観測していても、毎日の空の変化に飽きることはないだろう。それに加えて例えば、蜃気楼を見に富山湾の魚津市へ出かけるとか、ブロッキン現象を見に福島県只見町に行こうというように、現象発生の原因と背景を知って出かければ、観察対象の幅が広がることは間違いない。そうして著者自身がまめに出かけまくカメラに収めて広げてきた世界、この本はその集大成であるといえよう。

実践的な観察の提案は、次のように展開される。第1章「雲」は「雲の見分け方をおぼえよう」で始まり、様々な視点での観察法を紹介する。最も基本的な位置付けの章であり、全ページの約3分の1を割いている。第2章では「雨と風」を観察する。雨粒の形の写真のほか、竜巻やスプライトなどの珍しい現象の写真は必見である。第3章の「氷と雪」では、雪やひょうなどの降水のほか、御神渡りや樹氷、流水にも観察対象を広げる。第4章「大気での光の変化」は、蜃気楼や地球影などの不思議な写真が並ぶ。少々気になる点としては、映日や太陽柱もこの章で解説されているが、同

じ氷晶が原因の暈現象が主に次の章で扱われており、読者が混乱するかもしれない。その暈現象を始め、空の色や虹、オーロラなどの色鮮やかな現象を、第5章「大気がつくる色」で華麗に紹介する。さらに、付録の「気象写真の撮り方」では、最近のデジタルカメラの活用法にも言及しているところが実用的である。

著者は現役の高校教師であり、自らが魅せられた空の美しさ、不思議さについて本書の内容のように観察と教育を実践してきたのだろう。目を輝かせながら生徒たちに熱く語る様子が目に浮かぶ。しかし気象観察の成果は、なかなか気象学の各分野に実利的に反映させにくいかもしれない。気象観察のほかの気象関連教材といえば、天気図や気象観測、気象実験などがあり、それぞれ天気予報や観測技術、データ処理などにつながる即効性の教材であるのと対照的だ。そのような実利的な方向性を重点的に考えてももちろんよいのだが、身近な自然に対する関心を高め観察眼を養うことが今大事なのではないだろうか。子どもの理科離れがクローズアップされ、また「日没を見たことがない」という小中学生が増えているとの話も聞く。コンピュータやテレビの画面で何でも見られるようになり確実に便利になる一方で、リアルな現実が厳然と存在するという私たちは見失いがちである。本書はこういった事態に対する布石として、大いに期待できる書であろう。

やや大きさに評すれば以上のようになるが、それでは自分ではどのようにこの本を楽しむか。評者は2005年に新設された気象庁の航空交通気象センターで、航空局の航空交通管理(ATM)センターの航空関係者向けに気象情報を提供する業務に携わっている。本書の内容と直接関係する業務ではないが、ユーザーである航空関係者には、飛行機から見る空や空港の空が身近な方も多し。彼らと空の美しさ、不思議さを共有するためには、ぜひ常に手元に置いておきたい1冊である。また、空の観察好きの1人、あるいは空の写真好きの1人として、これからも時々眺めてワクワクしようと思っている。

(気象庁予報部 宮内誠司)